様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年 １０ 月　 ５ 日現在

機関番号：３２６８１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2011～2014
課題番号：２３５３１０２７

研究課題名（和文）近代日本の学問形成・教科書編纂と国学

研究課題名（英文）Science,Textbook and KOKUGAKU in Modern Japan

研究代表者
高橋　陽一（Takahashi, Yoichi）

武蔵野美術大学・造形学部・教授

研究者番号：７０２９９９５７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：「近代日本の学問形成・教科書編纂と国学」と題するこの研究では、近代日本の学問、とりわけ歴史学、国語国文学の学術研究から、修身、歴史、国語等の初等中等教育の教科書にわたって、国学者の関与の実態を明らかにするものである。この研究により、(1)近世国学で知られていた日本書紀の孟子引用が近代では忘れさられたこと、(2)帝国大学における宗教に関する学問研究が宗教系大学の成立に影響を与えていること、(3)伝統文化をめぐる国学の対応が昭和期の日本精神論の問題に示唆を与えることなどが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：This study on "Science, Textbook and KOKUGAKU in Modern Japan" is the research on the KOKUGAKUSYA (Japanologist in EDO and Meiji Era), who concerned Science in Modern Japan, especially study of history and literature, and Textbook of elementary and secondary Schools on moral education, history and literature. The conclusions are as follow. (1) The "NIHONSHOKI"'s quotation from "Mencius" was famous in Edo era but neglected in Modern Japan. (2) Study of religion influenced the development of religious universities. (3) The discipline of KOKUGAKU on traditional culture offers useful viewpoints to research on NIPPON-SEISHIN-RON in Showa era.

研究分野：日本教育史学

キーワード：教育史　国学　教育学　日本精神論

１．研究開始当初の背景

教育基本法全部改正を受けて「**伝統と文化**」（第 2 条）に関する教育が様々に議論されている。近代日本の歴史のなかでこのテーマに正面から対応した学問として、**明治期**に変容した**国学**を挙げるべきであるが、その総合的な研究や評価は、教育史の分野でも十分に進んでいない。

申請者は、明治期の国学が近代日本の教育に与えた影響を中心に、様々な宗教と教育との関係について研究をおこない、その概観図を教育史学会編『教育史研究の最前線』(日本図書センター、2007 年)の第１章第１節「日本の政教関係と教育」（高橋陽一）として提示した。また、「「**宗教的情操**」概念の歴史と教育実践に関する基礎的研究」（研究代表者高橋陽一、科学研究費補助金・基盤研究（Ｃ）、平成 19～21 年度）においても、宗教と教育学説の影響と矛盾を検討してきた。

明治維新以後の教育内容をなす諸学問については、西洋の学問の移入と定着のプロセスとして理解されて、明治初年の小学校翻訳教科書の導入から高等教育機関の学問形成までの教育史叙述の基本となっている。一方で、近世以来の国学が近代に新しい変化をとげて教育に影響を与えたことについても注目が進み、2010 年 6 月のシンポジウム「近代日本の教育と伝統文化」（明治聖徳記念学会と國學院大學研究開発推進センターの共催）が、教育社会学の天野郁夫（東京大学名誉教授）と神道・国学史研究の斉藤智朗（国学院大学准教授）と藤田大誠（国学院大学准教授）を報告者として開催され、高橋陽一もコメンテータとして参加した。また、申請者は、日本教育史学の形成に国学者が教科書や類書編纂で決定的な役割を果たしたことを論じた論文「**日本教育史学**の成立と国学―日本教育史略、文芸類纂、古事類苑、日本教育史略の関係」『明治聖徳記念学会紀要』復刊第 47 号、2010 年 11 月を発表した。

２．研究の目的

本研究は「明治期の学問形成・教科書編纂と近代国学」を課題として、歴史学、国語国文学、法学、芸術学などの学問から修身、歴史、国語、図画、唱歌等の初等中等教育の教科にわたって、国学者の関与の実態を明らかにするものである。本研究により、明治初期より国学者が海外との関係を視野に入れて明治期の**学問形成**や**教科書編纂**に関与した過程を明らかにする。このことで翻訳教科書と西洋化とその後の反撥という通史的理解だけでは十分に捉えられない、近代における国学の諸学問や教育への影響を明らかにするものである。

３．研究の方法

この研究は、国学者の著作、個人文書、行政文書、学校文書を史料として用いる歴史研究として行い、明治期の学問形成と教科書編纂という広範なテーマを扱うために、学問分野や教科の研究を縦軸、国学者の個人研究を横軸として設定する。そして 4 年間にわたって効果的に計画を進めるために、縦軸は法学、歴史学、国語国文学、芸術学から着手して倫理学（修身）や神道学へと広げ、横軸はまず 4 名の代表的な国学者から次第に対象人数を広げるという方法を採る。また、万国博覧会への日本の出典品に着目して、海外の史料などにも視野を広げるものである。

研究組織としては、研究代表者１名のみで遂行するが、史料調査や整理には大学院指導学生の協力を求め、また構想や計画検討のために諸分野の研究協力者を含めた研究会を組織する。研究会には、伊東毅（武蔵野美術大学）、駒込武（京都大学）、竹内久顕（東京女子大学）、田口和人（桐生大学）、小幡啓靖（社団法人実践倫理宏正会）、小川智瑞恵（東京大学史史料室）、田中千賀子（武蔵野美術大学非常勤講師）、小澤啓（武蔵野美術大学造形研究センター・リサーチフェロー）、斎藤知明（大正大学）の９名が参加した。

４．研究成果

(1)　2011(平成 23)年度（初年度）においては、学問分野・教科を縦軸、国学者を横軸として先行研究状況、史料の存在状況を明らかに計画に従って、対象とする国学者である小中村清矩、榊原芳野、佐藤誠実、木村正辞らの著作物、文部省、教部省、内務省など関係文書の調査を行った。教科書については、1872(明治 5)年以後の文部省編纂の 3 つの初等歴史教科書（木村正辞・那珂通高・内田正雄『史略』、大槻文彦『万国史略』、木村正辞『日本史略』）について、成立の背景や万国博覧会出展品の日本史紹介書との異同などを検討した。

初年度の成果に基づくものとしては、高橋陽一『**新版道徳教育講義**』武蔵野美術大学出版局、2012 年 3 月において、「第七章　伝統文化と愛国心・郷土愛」などに盛り込んだ。また 2011 年 11 月 20 日、日本道徳教育学会第 78 回大会では、貝塚茂樹・行安茂・高橋陽一・岩田文昭によるシンポジウム「『生命に>対する畏敬の念』をどう育てるか」で「「**畏敬の念**」と「**宗教的情操**」のあいだ」を報告して伝統文化研究の視点からの現代の道徳教育への提言とした。これらの成果発表において、教育基本法全部改正によって強調された**伝統文化**について、日本の伝統文化そのものを対象としてきた国学の視点から、現代の学問研究及び教育実践においても対象化して論じる必要性を強調した。

(2)　2012(平成 24)年度（第 2 年度）は、初年度から研究対象とした近代の国学者に加えて、近世の国学者や漢学者、古事記・日本書紀の解釈家などに対象を広げて調査をした。また、大学等の学問形成と初等教科書をつなぐ中等教育教科書、万国博覧会日本紹介冊子などにも資料収集と調査を広げ、明治期

の中学校や高等女学校の修身科や倫理学書なども対象とした。

第2年度の研究発表としては、高橋陽一「日本書紀一書の残賊の神勅―孟子と国学をめぐる解釈史」『日本教育史学会紀要』第3巻、2012年12月を発表した。ここでは『日本書紀』の天照大神の神勅の文言を対象とした近世の国学における解釈の変遷を検討した。近代や現在の人文科学研究においても取り上げられていない、『孟子』における「残賊」という文言が神勅として引用されたという説が、近世国学では採用されていたことを明らかにした。

また研究成果に基づいて、大谷大学における大学の学問形成についての講演「明治期の宗教教育における国家と学問と建学の精神」2012年12月に行った。さらに、学生向け教科書、高橋陽一『教育通義』武蔵野美術大学出版局、2013年4月において、本研究の成果に生かした日本教育史記述や伝統文化を含めた教育基本法の全文注解を行った。

(3) 2013年度（第3年度）は、前年度までの対象人物にくわえて、初等・中等レベルの教科書編纂と学問形成という大きな枠組みで全体像を描くまとめの段階へと研究を進めるとともに、研究成果の発表を行う計画で実施した。

具体的には、個別大学の学問形成と日本の宗教と海外の学術研究の関係を明らかにする典型的実例として大谷大学に至る真宗大谷派の高等教育機関について研究をまとめ、「建学の精神をめぐる学問と宗教と国家―近代教育史のなかの大谷大学」（大谷大学招待講演、2013年10月）を行った。ここでは、資料収集をすすめた帝国大学令・大学令と連動する私立大学・前身校の学則類、教育勅語解釈に関する書籍類、国家と宗教に関する「共通教化」仮説の検証のための宗教関係書籍及び学術論文などを踏まえて、大谷大学という個別大学の**建学の精神**を事例として学問と宗教と国家の関係を分析した。

(4) 第4年度となる2014(平成26)年度は、4年間の研究をまとめるとともに、今後の研究の展開を展望して、明治期の近代国学が過去のものとなった時期である大正期以後に、学問研究や教科書編纂に与えた影響を検討する視点へと移行した。すでに小中村清矩の歌舞音楽研究が昭和期の芸術学にも影響を与えていることを日本諸学振興委員会に即して高橋陽一「芸術学会」（奈須恵子・駒込毅・川村肇編『戦時下学問の統制と動員』東京大学出版会、2011年）において論じたが、さらに法学、歴史学、国語国文学の領域でも検証を行う計画ですすめた。この点において、昭和戦前期の各分野にわたる学問論としての**日本精神論**への注目ができたことが最大の成果であった。

本年度の成果としては、高橋陽一「建学の精神をめぐる学問と宗教と国家―近代教育史のなかの大谷大学」大谷大学真宗総合研究所『研究紀要』第32号、2015年3月を発表した。これは前年度の講演をもとに論文として発表したものである。また、書評として、高橋陽一「小笠原道雄・田中毎実・森田尚人・矢野智司著『日本教育学の系譜―吉田熊次・篠原助市・長田新・森昭』」日本教育学会『教育学研究』第82巻第2号、2015年6月を執筆した。この書評でも本研究の成果を生かして、歴史的事象としての**日本教育学**というテーマを日本精神論の観点から独自に研究する必要を強調した。

(5) 4年間を通じた成果と発表に関しては、国学者個人や領域別の研究成果の発表を引き続き行っていく予定である。具体的には、研究当初からの日本教育史学と国学の関係の視点については、2015年8月23-24日の日本教育史研究会サマーセミナー（会場は東洋大学）において口頭発表する予定で、報告要旨として高橋陽一「メディアとしての日本教育史―『日本教育史略』から現代まで」日本教育史研究会会報『日本教育史往来』第216号2015年6月に執筆した。また、2015(平成27)年度より新たな研究テーマ「昭和戦前戦中期における日本精神論の興隆と退潮」（科学研究費補助金、基盤研究(C) 課題番号15K04252）に移行しているが、このテーマの基本的構想、とりわけ**日本精神論**への観点は本研究による着想である。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

高橋陽一「日本書紀一書の残賊の神勅　―孟子と国学をめぐる解釈史」『日本教育史学会紀要』第3号、34-61頁、2012年12月。

高橋陽一「建学の精神をめぐる学問と宗教と国家―近代教育史のなかの大谷大学」大谷大学真宗総合研究所『研究紀要』第32号、2015年3月。

高橋陽一「書評：小笠原道雄・田中毎実・森田尚人・矢野智司著『日本教育学の系譜―吉田熊次・篠原助市・長田新・森昭』」日本教育学会『教育学研究』第82巻第2号、2015年6月。

〔学会発表〕（計３件）

高橋陽一「「畏敬の念」と「宗教的情操」のあいだ」日本道徳教育学会第78回大会、2011年11月20日、（貝塚茂樹・行安茂・高橋陽一・岩田文昭によるシンポジウム「『生命に対する畏敬の念』をどう育てるか」招待講演）。

高橋陽一「明治期の宗教教育における国家と学問と建学の精神」　大谷大学真宗総合研究所「建学の精神」推進教育研究第5回研究会、2012年10月3日、大谷大学響流館真宗総合研究所(招待講演)。

高橋陽一「建学の精神をめぐる学問と宗教と国家―近代教育史のなかの大谷大学」、2013年10月、大谷大学講堂（招待講演）。

〔図書〕（計２件）
高橋陽一『新版道徳教育講義』 武蔵野美術大学出版局、2012 年、全 278 頁（「第七章　伝統文化と愛国心・郷土愛」などが本研究の成果である）。
高橋陽一『教育通義』武蔵野美術大学出版局、2013 年、全 608 頁（同書の第 9 章から第 15 章の日本教育史の概略に本研究の成果が反映している）。

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計０件）
名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等　なし
　なお、本研究の進捗や研究代表者の研究業績については、高橋陽一研究室が刊行する報告書『造形と教育』（ISSN：2187-5375）各号で公開した。該当号は、第 5 号 2012 年 1 月、第 6 号 2013 年 1 月、第 7 号 2014 年 1 月、第 8 号 2015 年 1 月である。第 5 号までの誌名は『武蔵野美術大学大学院「教育学研究」ゼミナール報告書』であり、第 6 号より誌名を変更した。

６．研究組織
(1)研究代表者
　高橋陽一（TAKAHASHI, Yoichi）
　武蔵野美術大学・造形学部・教授
　研究者番号：70299957
(2)研究分担者　なし
(3)連携研究者　なし